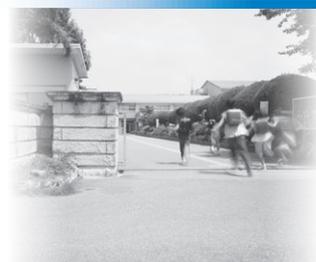




No.5 2021.3.5
岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

〒020-0022
岩手県盛岡市大通一丁目1-16
岩手教育会館4F 岩手県教互センター内
TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535
E-mail:j.sato8252@gmail.com



リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



学び続ける先生に期待



岩 泉 康 喜

(ラーニング・サポート・しわ 代表)

略
歴

1984(S59)年 4月 岩手県公立中学校教員採用
2016(H28)年 3月 勲奨退職(教職32年間)日語小学校で退職
10月 勇気づけトレーナー 資格取得*
11月「ラーニング・サポート・しわ」(教育・学習支援事業 起業)
12月 コミュニティカウンセラー 認定**
2017(H29)年 1月 SMILE(愛と勇気づけの親子関係セミナー)リーダー 資格取得*
3月 アドラー・カウンセラー養成講座修了
2018(H30)年 1月～ 紫波町 人権擁護委員
2020(R2)年 4月～ 星北高等学園 講師
2020(R2)年 8月 家族会議ファシリテーター 資格取得*

* ヒューマン・ギルド ** 日本支援助言士協会
【職歴】 中学校勤務 11年間(教諭 黒石野中、西根第一中2校11年)
教育委員会勤務13年間(指導・管理主事等 町村5年、県8年)
小・中学校勤務 8年間(校長 紫波第一・二中2校6年間、日語小1校2年間)

「学習会を開きたいので来て頂けますか？」

「クラスの男の子数人に、授業を妨害されて困っています。どう対応していったら良いか教えて下さい。同じように悩む先生が私以外にもいるので、できれば学校で学習会を開きたいので来て頂けますか？」と、私が開催するアドラー心理学の学習会に参加している小学校の先生から連絡が入りました。

全国では新型コロナウイルス感染症が拡大し、県内でも感染者が確認されている中であっても、同僚と一緒にぜひ学習したいという彼女の熱い思いが伝わってきました。

そこで、校長先生のご了解を頂き、9・11月と学習会を行いました。学習会は「みんなが笑顔になる学級づくり」と題し、学級担任と担任外やスクールカウンセラー等の教職員が連携し「解決志向の学級づくり」に取り組む方法を学び合うものでした。

私は、定年より1年早く退職し「アドラー心理学」を学び、その理論や技法が子育てや教育にと

ても役立つこと、また、知人から紹介された「解決志向アプローチ」の理論や技法の有効性を実感してから、自分が学んだことを身近な人に伝える活動を、2016年暮れから地元で始めていました。

「上手くいかないなら、違うことをせよ」

同僚と一緒に学校で学習会を企画した先生は、学級運営が「上手くいっていない」現実を直視し、何か「違うこと」に取り組まなければならないと考えていたのでした。

この先生の姿勢は、「解決志向アプローチ」という心理療法の「中心哲学」とも呼ばれているルールの「ルール3」に沿ったものだと感じました。その中心哲学は次の3つです。

ルール1：上手くいっているなら、変えようとするな

ルール2：一度でも上手くいったなら、またそれをせよ

ルール3：上手くいかないなら、違うことをせよ

私が教職に就いた昭和の終わり頃から、不登校、いじめ、学級崩壊などの問題が、三十数年経った今も存在していることを、教職を退いてから、私は不思議に思い始めました。

しかし、このルールを目にして、私はその謎が解けたように思いました。

これらの「問題への対応」が、変わっていないから解決に至っていないのではないかということに気づきました。

「問題志向から解決志向へ」

これまで学校では、問題の解決のために、「問題」（うまくいっていないこと）は何かを見つけ、原因を明らかにし、「問題」への対策や指導を行う（悪いものを取り除く）という「問題志向型」のアプローチがなされてきました。

しかし、このアプローチでは、問題が解決に至らないことが多いようです。

一方、「問題」ではなく、既に「うまくいっていること」や「できていること」に着目するアプローチがあります。それは、望む「解決の状態」や「未来の姿」がどのようなものかを探り、個人や環境にある「資源や強み」を評価し、利用して、うまくいっていることを更に続けることを重視して、より良い状態を協働して作りあげていくというものです。

このような問題解決のアプローチは、「解決志向アプローチ」と呼ばれます。これは、1980年代にアメリカの短期家族療法センターで、治療効果を挙げているカウンセラーのカウンセリングの分析から開発されたアプローチです。(DeYoung & Berg, 2008)。

「解決志向の学級づくり」

私に連絡をしてきた先生は、「解決志向の学級づくり」の仕方を学びたいというのでした。このプログラムは、アメリカで開発された学級運営への介入方法“Working on What works：うまくいっていることに取り組む”(Berg & Shilts, 2004)〔WOWW と略記〕と呼ばれる「解決志向アプローチ」をベースに、黒沢幸子氏と渡辺友香氏が、日本での WOWW の先行実践を踏まえて開発したものです。

これは、学級運営に困難を感じている担任の学級に、担任外等の支援者が定期的に授業参観に入り、授業の終わりに、授業でうまくいっていたこと、学級の肯定的な面について注目し、コメントをして、子どもたちと担任が協働して、学級をよ

り良い状態に導くプログラムです。

学校で開催した学習会では、このプログラムとその実施の方法を、同じ学年の学級運営に苦慮している先生と生徒指導主事や学年主任の先生と一緒に学び合いました。

その後その先生から、スクールカウンセラーと一緒にプログラムに取り組み、学級の子どものみならず、自分自身にも望ましい変容があったという報告がありました。

「子どもの不適切な行動の目標」

私はアドラー心理学を学んで、問題を起こす子どもの心理が理解できるようになりました。学級担任をしている時は、分かっているつもりでしたが、その理解は表面的であったことに気づきました。

アドラー心理学では、人の言動には、本人が意識する、しないに拘らず、目的や目標があると考えます。その行動の目的は、自分が所属する共同体の中に、自分の居場所を見つけることであると考えます。そして、子どもは、そのために様々な行動をとりますが、その行動には、適切な行動も不適切な行動もあります。

アドラー心理学者ドライカースは、子どもの不適切な行動を4つに分類し、その目標を明らかにしてくれました。彼によれば、その不適切な行動の目標は、「注目」、「権力闘争」、「復讐」、「無力さを示すこと」としてしましました。

この考え方を今日の教育の問題に適用すると、不登校の子ども、いじめをする子ども、授業中に騒ぎ、教師の指示に従わない子どもの行動が理解でき、適切な対応ができるのではないかと私は考えています。

「学び続ける先生に支えられる岩手の学校教育」

前述の同僚と学び続ける先生は、アドラー心理学を学んでいるので、学級の不適切な行動をする子どもの目標を探りながら、子ども達自らが適切な行動とることができる信じ、一人一人をリスペクト（尊重）しながら、子どもと関わり、良好な関係を築いています。

私の身近には、学び続けている先生が少なからずいらっしゃいます。そして、そのような先生は、どんな困難なことに直面しようとも、自ら困難を乗り越える勇気と意志を持っています。

このような先生方に支えられる岩手の学校教育に、私は希望を感じています。

人と人がつながるから生きていける



森 越 康 雄

略歴

1970年 岩手大学教育学部甲一類美術科卒業
岩手県公立中学校教員
(美術・数学担当)

1996年 中学校教員退職
教職員組合等役員
(岩教組・日教組・連合など)

水彩画個展等多数開催
「GALLERYもりこし雫石水彩館」開設
美術団体エコール・ド・エヌ会員、白楊会会員

教員生活 20 数年 (教職員組合専従のため中途退職)、山あり谷ありだったというよりほとんど谷底をさまよっていたのかもしれない。家庭訪問の際、「いい先生が担任になったので家族中でお祝いしました」と言ってくれた時は幸せだった。またリーダーが次々に育ち、自主的に活動を広げていく迫力に感動したこともあった。しかし今でも苦い思い出としてこみあげてくるのは、子どもたちに自分の思いが伝わらない、すれ違いというよりもどんどん離れていくことの絶望感。

初めて学級担任になった新採用二年目、交換ノートに悩みを書いてきた生徒に「この苦労はやがて自分のためになる」みたいなことを書いた。するとページいっぱい1文字ずつ、「さ・よ・う・な・ら」と書いて、それっきりノートを出さなくなった。また次の学校では、担任した女生徒から私に対して交換ノートに「汚い字で書くな！」(実際汚い) と怒りの書き込みがあり、事情を聴きたいと家に電話したところ娘の剣幕に驚いた母親から後で「何かあったのですか」と心配の電話が入ったほどだった。数年後同窓会で会ったら、何事もなかったかのようにケロッとしていたが。

ひとり一人性格も成育歴も異なり、ましてや思春期の子どもたちはその時々で様々に変容する。教育への熱い思いだけで教職に就いた若者が、現実の子どもたちの前で戸惑い立ちすくむのは当たり前と言えれば当たり前。子どもたちへの指導が思うようにいかないとき、焦れば焦るほど泥沼にはまっていく。絶望的になっている自分を救ってくれたのはなかまだった。職場のなかま、生活指導

サークルや組合のなかまが話を聞いてくれた。泣き言を聞いてくれた。

地域でトップの番を張っていた子どもの担任になり、学級のリーダーを務めるまでに成長したと思った矢先、かつてのグループの先輩と連れ立っているのをとがめた私とにらみ合い、「もう学校に来ねー」と捨て台詞を残し去った体育祭前日。これまでの苦労が水の泡になったと途方に暮れる自分を囲みとことん話を聞いてくれた学年のなかまたち。翌日その子は「ごめん」と言って、自分の役割だった学級の団旗を完成させて登校してきた。

私が青年部の頃、「職場分析運動」に取り組んだ。毎日の出来事=感じたことをメモし、職場で付き合いようというものだ。辛いこと・うまくいかないことを自分で記録するのだが、教育実践(仕事) がうまくいかないのは自分の能力が足りないからだと自分を責めていた。でも突き合わせてみると同じような人が隣にもいたし他の職場にもいることに気づく。そこから問題点を話し合っていくと、こなしてもこなしてもこなしきれない過重な仕事量の問題・内容の煩雑さ・勤務時間等々の問題点が明らかになっていく。これっていったいどこから来ているのか? そうした話し合いから子どもたち保護者を囲む学校・教育・地域・政治の問題に気付いていく。「できることから改善していこう」と具体的な行動へとつながっていく。話し合いは民主主義の原点である。

私は教職員組合運動に携わってきて、よくマスコミから質問を受けた。「組合って何ですか?」と。

私は即座に「人と人をつなぐことです」と答える。そのころは自分が言い出しっぱだったのが、後から後からあちこちで言い出し始めた。特許をとっておけばよかったと後悔している。教育も「人と人をつなぐこと」である。

人は誰でも多かれ少なかれ辛いことがある。でもさらに辛いのは、そのつらさを誰にも言えないことである。子どもたちのイジメ・自死の問題は、大人社会そのものの問題でもある。偏見・差別・虐待は陰湿な世界にはびこる。公明正大な論議の場でその問題点・残虐性を明らかにし、解決していかなければならない。

上級生による下級生へのイジメがあった。一年生は学級で話し合い、そのことを明らかにしようとしたが、「怖い」とビビる。「暴力をやめてください」とチラシを配った。こそこそ裏口から入ろうとする三年生へも配った。やがて分かった三年生の言い分は、「自分たちも一年生の時同じ目にあったから、今度は自分たちの番だ」。この「伝統」は延々と続いていたのである。番長が卒業していくとき、次の番長への引継ぎと称して「卒リン(卒業リンチ)」という「伝統」さえあった。

こうした校内民主化運動に取り組む時、子どもたちは教職員を決して信じていない。うかつに乗せられたら、後でひどい目にあうのは自分たちだ。生活指導全校集団づくりレポートの表題を「先生どあ(たちは)口ばりだ」とした。教職員集団の本

気度が問われるのである。民主度が試されるのである。自らの生きざまが教育への生きざまである。

私は縁あって、全国退職教職員生きがい支援協会の仕事をした。その活動の中で大きなものは「傾聴ボランティア」である。とにかく相談者の聞き役に徹する学習をする。ところが“先生”を経験した人はこれが苦手である。すぐ自分の意見を言いたがりアドバイスしたがる。そうなったら相手は口も心も閉ざす。相手の言葉にうなづき次のことばを待つ中で、徐々に本人は解きほぐされていく。かつては相手にされなかった「傾聴ボランティア」は、震災の時も大きな力になった。

今の学校現場は、私が現役の頃よりはるかに厳しく困難になっているのではないかと危惧する。あれもこれもと課題が次々に増大し容赦なく押し付けられる。子どもたちを毎日目の前にする教職員の思い・願いよりも、強大な権力の一方的な圧力がますます学校現場を息苦しいものになっている。先日も教員採用への志願者が減り続けていることが報じられたばかりだ。目先の儲けだけにとらわれ国家百年の計と言われる教育が息苦しいものにされていくとき、教育の自由な発想が締め付けられていくとき、この国にも世界にも未来はない。

国の内外を見ると、目を覆いたくなる差別主義者がはびこっている。片やそれに抗して声をあげ立ち上がる人々がいる。あなたは、そして私は、どちらの立場に立つか!!



森越康雄 「満開」(雫石町弘法校)

オピニオン
OPINION

岩手県教職員組合・中央執行副委員長
八重樫 千晶



「57分の1」「25分の1」の「1」の存在から考えること

いきなりですが、みなさんにクイズです。ある新聞に掲載されていた問題です。

地方出張する国会議員に宿泊予約を取っていた女性秘書、「先生、ホテルがいっぱい、シングルがなくツインならあるのですが、私と同じ部屋でもいいですか？」と聞きました。国会議員は「同じ部屋でいい」と答えたのですが、あなたはこの話をどう思いますか？セクハラ？それとも……？

さて、みなさんの答えはいかがでしょう。

私の2人の子どもにも上のクイズを出してみました。1人の答えは、「国会議員からのセクハラ」もう1人は「セクハラではない」その理由は「国会議員は、男性って思っていないから」との答え。確かに、この問題には、国会議員の性別が書かれていません。正直に言うと、この問題を読んだときに、私は即答できず、悩んでしまいました。秘書は女性、国会議員は男性…？私も含め、国会議員＝「男性」と思い込んでしまった人は、自分の中の無意識の偏見（これをアンコンシャスバイアスと言います）があることを認識したほうがよさそうです。

「57分の1」

普段の生活の中で、私たちは、ある属性にあてはめて、必要以上に行動や考え方を制限や区別していることがあると感じます。ある属性とは、例えば、国籍、人種、障がいの有無、年齢別、おとな、子ども…などです。「57分の1」。この「1」は何を表しているかというと、日本オリンピック委員会の女性評議員の数です。評議委員会は意思決定機関であり、物ごとを決める場に57人中女性が1人。女性参画率は、たった「1.7%」です。

これは、やはり問題だとは思いませんか？女性がいないことになってはいやしないかと疑いたくなるのは私だけではないはず。そういえば、私が出席した最近の岩手県のある会議の委員の比率は、

25分の1。1＝「私」で、女性参画率は4%です。あくまでも、見た目での判断ですので、性自認から言うと、参画率は違って来るかもしれません。「男性」だから「女性」だからということを知りたいのではありません。大切なのは、ジェンダーの視点（ここではあえて女性、男性と性別を二分化する表現は使いません）を入り口に、社会的に弱者と言われる人たちやマイノリティの人たちに寄り添いながら、物ごとを考えていくということだと思ふのです。

「1」の存在

2011年3月の東日本大震災大津波という大災害を経験した私たちは、避難所運営や復旧・復興において、女性の参画が必要不可欠であるということ学びました。今回の新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大も災害と等しいものだと捉えれば、やはり、女性や子どもたちなど社会的に弱者と言われる立場の人たちの問題を浮き彫りにしています。例をあげると、約6割が女性と言われる非正規労働者やケア労働者の問題、ひとり親家庭の困窮、DV被害者の増加など枚挙にいとまがありません。どんな状況になったとしても、どんな人でも、個人の尊厳が尊重され、自分の居場所がある、そんな社会をめざしていきたいものです。そのためには、無意識の偏見や固定概念に縛られすぎているかと絶えず自分のあたりまえを疑うこと、そのことが、さまざまな立場の人たちが参画できる道すじになると思っています。



森越康雄 「うららか」(雫石町コテージ村)



教室の窓から



Yをクラスの仲間に (その1)

「先生、Y が教室から外に抜け出しました!」ある日、1 時間め終了後の休憩時間に班長の 1 人が職員室に駆け込んできた。

「外って?」

「昇降口から出て、裏の田んぼのあぜ道を走って逃げてます。今、班長の何人かが走って行って追いかけてます。」

「そうか、じゃあ急いで行ってみよう。」

Y は 1 年生の時には私が担任していないクラスの生徒だったが、その時からまわりにしばしば乱暴な行動をすることが学年で話題になっていた。それに、時々授業から抜け出すこともあり、クラスの生徒たちはどう接してよいか困ることが多かったのだった。

初任校の O 中学校 4 年目の 1988 年度、私は 2 年生の担任となり、生徒たちと共同で学級をつくる取り組みをいろいろと試してみたいと思っていた。その一つが、当時「生活指導(民主的集団づくり)」の学習会で学んだ「班指導・リーダー指導・討議指導」の実践だった。若かった私は、何とか「このクラスで一緒に過ごせて良かった」と全員が思えるようなクラスができたらと思い、生徒たちとともに試行錯誤をすることになった。そして、そのためにリーダー指導の一つの方法として、「班長会」を大事にしていくことに取り組んでいた。

昇降口から外に出てみると、ちょうど「班長会」のメンバーに付き添われて Y が戻ってくる場所が見えた。普段ちょっと乱暴なところもあり、注意すると反抗的な態度をとるところもある彼が、なんだか妙に神妙に見えた。

まわりの班長たちは、「次の数学はちょっと苦手かもしれないけど、わからないところは教えるから一緒にがんばろうよ」「それに、3・4 時間めは Y

の得意な調理実習もあるからさ」などと話しかけている。

私は少し意外だったので、呼びに来てくれた班長に尋ねた。「Y って家庭科好きだっけ?」

「先生、Y は両親が仕事で帰りが遅くて、お姉ちゃんと二人で夕食を作って食べていることが多いよ。」

「へえ～そうなんだ、知らなかった」と別な班の班長が。

私は、Y を自発的に追いかけた「班長会」の行動をうれしく思うとともに、もしかしたら、Y も先生に追われるよりクラスの仲間に捕まえてほしかったのかもしれないと思った。

仲間意識の薄いクラスであれば、まわりに迷惑をかける生徒が抜け出しても、知らない振りをするかもしれない。でも、「班長会」は自ら追いかけてようとし、Y もそれを受け入れた。私は、「班長会」で日々話し合ってきたことが、班長たちを孤立から救い、1 人では対応が大変な事も協力して乗り越えようという意識を育て、そして、クラスのみんなが仲間として関係性を築き始めていることに、勇気もらったのだった。

その日の調理実習は、おらずに魚のフライをつくるというものだったが、「魚を三枚に上手におろす」ことができたのは、クラスの 45 人の中で Y だけだった。

生徒たちは、Y のまわりに集まって、「すごいね」とか「上手いね」とか口々に言っている。Y も照れた笑顔で、まんざらでもないようすだ。

私は、それを見ながら、「『昔』のクラスでは、勉強や運動以外にも遊びの名人とか、昆虫博士とか、鉄道マニアとか、漫画評論家とか、子どもたちのいろんな『得意』が認められ、一目置かれていたけれど、今の学校は果たしてそれぞれの子どもたちが持っている『得意』を認め合える状態になっているのだろうか」と考えさせられたのだった。



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。
<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは
こちらから!

